SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ごあいさつにかえて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐谷, 文雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006124

ごあいさつにかえて

桐　谷　文　雄

私は 約10年近く東京に住んでいたのであるが、今度静岡に行くことになってから多くの友人知己から、静岡は良いところだ、気候も暖いし東京には近いし、新幹線が動き出せば東京の郊外と同じようなものだと耳にたこのできる程聞かされた。実際に私は今までに静岡に住んだこともなかったし泊ってみたこともない。

ただ私の前任の機関が天竜川で佐久間ダム、秋葉ダムを築造したり、佐久間発電所から東京への25万ボルトの高圧送電線をつくったりしたので、そのころ良く静岡は通過したことがある。

現場には宿泊施設があるし東京には近いので、ついぞ静岡に泊ったこともなかった。

だから私にとって静岡は全く初めての土地ということになる。私はこの土地の人情、風俗、あるいは地物、風物に大きな興味と期待をいだいて赴任して来たのである。このような興味と期待とは一朝一夕に満足させられるものではない。私は時間をかけて段々に慣れ親しんでいきたいと考えている。どうか今後ともみな様方のご指導をお願いする次第である。

ここで一言、私の専門とする地学の面での感想を述べることをお許し願いたい。

まず第一に感じていることは静岡県は地学を探求しようとする者にとって非常に良いフィールドであるということである。

県の西端は日本のback bone といわれている中央構造線によって限られ、東端はこれまた日本を東北日本、西南日本の二つに区分する大地構帯Fossa magna によって限られている。さらにまた静岡市はFossa magna の西縁をなす静岡一糸魚川構造線の発端の地であるともいえる。日本の構造地質学はこの意味で静岡に始まると威張ってもよいではないか。県の西部から東部へと古い時代の地層から順に新しい時代の地層へと南北性の帯状構造がつづき、日本のいわゆる西南日本外帯の様相がはっきりうかがわれる。ただ、九州、四国、紀伊半島とつづく西南日本外帯の東西性の構造がFossa magna によって推し曲げられ、静岡県内では南北性に近い帯状構造を示すだけである。新しい時代の堆積物である第三紀層が天竜川東岸から御前崎へ、さらに静岡、清水市周辺に発達する有様も紀伊半島の新宮市付近や四国の室戸岬や足摺岬付近の有様と良く似ているし、従ってこれら各地の第三紀層の地質時代もさしたる差はないことであろう。

Fossa magna から東では富士山、箱根山および伊豆半島に新期の火山岩類が錯綜し

て発達し、火山や火山岩類の探求者にとつても良いフィールドを提供してくれている。欲をいえば深成岩類の発達がほとんど見られないことが残念だ。しかしこれとてもお隣りの愛知県や長野県下へ足をのばせばそのフィールドはいくらでもある。鉱床の存在も非常に多いし、温泉もまた伊豆半島をはじめとしてたくさんある。このように地学探求者にとってなかなか良いフィールドが静岡市を丁度中心として適当な距離のところに存在しているということは他県では見られないことである。

こんなことから私は地学を探求する者の一人として静岡はほんとうに仲々良いところだという実感がわいて来つつある。友人知己から静岡は暖いからとか東京に近いからとかで良いところだとさんざんいわれたが、それ以上に自分の専門の立場からも、なるほど良いところだとじっくり味わえることはなんとうれしいことだろう。

さらに申し上げるならば、静岡県は西に日本有数の高山地帯である赤石山系を、東に典型的な層状火山である富士山をひかえ、また狩野川、富士川、安倍川、大井川、天竜川等の著名河川を持ち、海岸沿いには低夷な段丘地帯と開けた広い沖積原等が存在しており、これらに基づく応用地学の面においての種々の問題が今までもあったろうし、今後も私等の課題として提供されることだろう。即ち山間地や川沿いの地すべりや山崩れ、ダム築造にともなう、あるいは築造後の種々の問題、工業地帯の軟弱地盤の問題、工業用水というよりも一般的な地下水の問題、道路や隧道の問題、温泉掘削の問題及び地熱開発の問題等、災害地質や土木地質の種々の問題が宿命的に県下には伏在しているものと考えられる。一般に土木地質の問題では構造物が地盤に力を加える場合と、逆に地盤が構造物に力を加える場合とに分けられる。

ダムや一般の建築物は前者であり、隧道や地下発電所等の地下構造物は後者の場合に相当する。県下におけるこれらの問題は地域開発が進むにつれてそれぞれに表面化するであろう。これらの種々の問題もまず地学の問題であり、次の段階ではじめて土木設計、土木施工の問題となるのである。

このように地学の一面には社会の進歩発展に直結した問題、いわば私等の日常生活の向上に直接つながる部分がたくさんあるのだ。しかもその解決は私等地学にたずさわるものの責任においてしなければならないのだということを近代的地学探求者としては忘れてならないことである。

近代的地学や近代的土木工学のなかった時代の登呂の遺跡の古代人が安倍川の氾濫原の中で苦闘した様をしのびながら、またいつかはそれに堪え切れずに安住の地を求めて移っていったであろうことを思いながら、ひとこと皆様方へのごあいさつと致します。（1964. 11. 15）